

研究活動をふりかえって

主任 清水 稔

1. 研究の課題

わが研究班の2年間(1992年4月から94年3月)にわたる活動は、まずアジアのなかに日本をどう位置づけるかを課題として掲げながら、主として東アジア(中国・朝鮮)と日本との関係・交流に焦点をあて、(1)前近代の日本と東アジア、(2)近現代における日本と東アジア、(3)東アジアの文化と日本、の3領域からそれぞれ進められた。研究にあたっては、第1に日本と古くから深い繋がりのある中国・朝鮮等の、いわゆる東アジアと日本との関係・交流の過程を重視すること、第2に日本・中国・朝鮮等のいずれかの地域を研究のベースとしながらも第1を視野にいれた考察をすることとした。

東アジアと日本との関係・交流の過程には、一方的なこともあれば、相互に係わりあうこともあったし、直接的なこともあれば、間接的なこともあった。その内容も、政治的・経済的・社会的・文化的なこと等さまざまである。この関係・交流の過程に伝播・影響はもちろんのこと、侵略も含まれていることはいうまでもない。わが研究班では、このような関係・交流の諸過程を分析することによって「日本と東アジアとの多様な関係、多様な側面」を明らかにするとともに、さらに言語・文学・民俗・思想等の比較分析を通して「東アジアと日本の同質性およびそれぞれの特異性」をクローズ・アップさせることにある。以下において、研究報告をされた班員の各領域における研究課題(役割分担)を明示しておきたい。なお研究員の名称は研究活動期間中のものの、所属・職階は1994年度のものである。

(1)の領域では、主として古代中国と日本との関係について、とくに文化の源流を考える視点で考察する。

山口 修(兼担研究員, 本学文学部教授, 仏教文化専攻)

古代・近代の天皇の呼称をめぐって

河野通明(嘱託研究員, 神奈川大学経済学部助教授, 日本史学専攻)

農業からみた日本と東アジアの関係

杉本憲司(嘱託研究員, 本学文学部教授, 東洋史学専攻)

日中古代文化交流史

徳永洋介(嘱託研究員, 本学非常勤講師, 東洋史学専攻)

宋元代の紛争処理システム——日本との比較を通して

貝 英幸(自由研究員, 京都市歴史資料館調査員, 日本史学専攻)

日本中世流通史からみた日朝交渉史 *1993年度参加

峯 雅彦(自由研究員, 大阪府立今宮工業高等学校教諭)

古代日本における仏教音楽の受容 *1993年度参加

(2)の領域では, 明治以降の日本と中国・朝鮮との関係について, とくに歴史と文化の両面から考察する。

北西 弘(専任研究員, 本学総合研究所教授, 日本史学専攻)

明治仏教の海外布教 *1993年度参加

清水 稔(兼担研究員, 本学文学部教授, 東洋史学専攻)

21か条要求をめぐる日中関係について

原田敬一(嘱託研究員, 本学文学部助教授, 日本史学専攻)

日清戦争をめぐる諸問題——とくに軍夫をめぐって

三谷憲正(嘱託研究員, 本学文学部助教授, 国文学専攻)

近代文学における韓国観・朝鮮観

森本正一(嘱託研究員, 本学教育学部教授, 教育学専攻)

日中両国の国語科教育と文字教育について

吉田富夫(嘱託研究員, 本学文学部教授, 中国文学専攻)

中国の文学作品にみる日本像, 日本の文学作品にみる中国像

(3)の領域では, 民俗学・社会学・言語学・文学の分野から中国・日本・朝鮮の諸様相とその差異をさぐる。

申 禮淑(嘱託研究員, 本学非常勤講師, 日本文学専攻)

日韓両国の季節観・自然観

八木 透(嘱託研究員, 本学文学部助教授, 民俗学専攻)

家と通過儀礼をめぐる日韓の比較民俗学的研究

豊福陽一(自由研究員, 高野山大学助教授, 社会学専攻)

むらの指導者とむらの自治に関する比較研究

中野 遼(自由研究員, 武庫川女子大学教授, 栄養学専攻)

食事と健康——中国・韓国留学生の食事調査を通じて

政岡伸洋(自由研究員, 本学非常勤講師, 民俗学専攻)

農耕儀礼の日韓比較研究

2. 1992, 93年度の研究活動の概要

〔A〕総括

わが研究班では研究活動の基本を次の2点に置いてスタートした。まず第1は研究報告——討議の形式で班運営をすること, 第2は研究員が上記の3領域のいずれを選択するかは自由とするが, 班員の共通認識として東アジア, とくに中国・朝鮮と日本の関係を視野にいたれた報告・議論の場とすること, であった。

一見とりとめのない研究会のように思われたが, ふりかえてみると, 1992年度は15回の研究会, 延べ19本の研究報告(そのうち3本は班外から招いた講師による特別報告), 93年度は21回の研究会, 21本の研究報告(そのうち特別報告は4本)が行なわれ, 実に多彩な話題が提供された。研究会は班員の情熱と意欲に支えられ, 毎回20名前後の研究員(班員は専任1名, 兼担2名, 嘱託9名, 自由13名)が集い, 4時間ちかくにわたって報告と討議に花を咲かせた。そこで取り上げられた分野は, 歴史あり, 文学あり, 社会学, 民俗学ありと, 実に多種多様, その切り口も, 人物あり, 作品あり, 社会構造や習慣あり, 思想や文化, 道具や技術等々, さまざまであった。話題は韓国・中国・日本の古代から現代にまで及んでおり, わが班に与えられているテーマの大きさを物語っている。班員のこうした専攻分野の多様さを反映して, 東アジアを考える問題意識や視点, 史料の分析手法や課題へのアプローチ等々の多様性が浮き彫りにされ, 班員相互の研究視角に大きな刺激を与えた。

わが研究班は, 課題を何か一つのものに収斂させる努力をあえてしなかった。「東アジアと日本」という大きな課題を, いろいろな角度から各研究員の好みに応じて自由に切り取り, それぞれの調味料で自由に味つけしながら, 班員各位の賞味に供し, 批判を仰ぐ形を守り通した。それは同時に課題をより深く掘り下げていく機会を失うことにもなったが, 2年という研究期間からすれば, やむをえない班運営であったかもしれない。

研究会活動に新風を吹き込む役割をになったのは、班外から招いた講師による特別報告であった。講師の皆様は次のとおりである。報告のタイトルは〔B〕研究会の活動についてを参照のこと。なお所属・職階は当該年度のものである。

1992年度

安 志敏 (中国社会科学院考古研究所研究員)

岡山善一郎(天理大学朝鮮学科講師)

竹田 旦 (創価大学文学部教授)

1993年度

井上秀雄 (樟蔭女子短期大学教授)

王 維坤 (西北大学副教授)

菅野 正 (奈良大学文学部教授)

高屋定國 (本学社会学部教授)

研究会活動の中核としてその重責をになっていただいたのは嘱託・兼担研究員であった。通常の公務を持ちながらの研究会参加はかなりの負担を強いたとはいえ、研究会活動の継続と活性化に大きな役割を果たしていただいた。またフリーな立場で参加された、大学院生を中心とする自由研究員には、運営や討論、報告の面でたえず大きな支えとなり、研究会活動の持続におおいなる貢献をしていただいた。ここで研究報告はされなかったけれども、班員として参画していただいた方々と研究課題を記しておく。なお所属・職階は研究活動期のものである。

大槻倫子 (陶芸の森陶芸館学芸員, 東洋史学専攻)

日明貿易における陶磁器の輸入について

金 成俸 (済州大学校副教授, 国文学専攻)

古典文学論

* 1992年度参加

黄 志軍 (本学非常勤講師, 中国語学専攻)

言葉からみる日中文化の違い

* 1993年度参加

手塚利彰 (本学大学院修士課程在学, 東洋史学専攻)

チベットと清朝

都 基禎 (本学大学院博士課程在学, 国文学専攻)

日韓両言語の比較研究

西川利文 (本学研究員, 東洋史学専攻)

古代教育制度の比較研究

白 景國 (本学研究生, 国文学専攻)

日韓の比較文化論

*1992年度参加

吉田みず穂(本学大学院修士課程在学学生, 東洋史学専攻)

解放区における教育と宣伝活動

〔B〕研究会の活動について

2年間にわたる研究会活動(研究報告・シンポジウム)については、すでに『総合研究所報』3号(1992年11月1日)、4号(93年5月1日)、5号(93年11月1日)、6号(94年5月1日)に分載されているし、また1992年度の研究活動の総括と位置づけについては『総合研究所紀要』創刊号(94年3月14日)に掲載されているので、ご高覧いただければ、わが研究班の全容と各研究員の諸論考をご理解いただけたと考え、ここでは各年度の報告テーマを一覧するにとどめる。

〔1992年度開催の研究会の記録〕

第1回(1992年4月23日)

野中寺弥勒台座銘考——とくに「中宮天皇」の語について(山口 修)

第2回(5月7日)

<特別報告>日本古代文化のルーツと大陸(安 志敏)

第3回(5月12日)

日本在来の犁牽引法からみた

アジアにおける犁耕の伝播経路の考察(河野通明)

第4回(6月4日)

韓国漁村におけるむらの指導者とむらの自治(豊福陽一)

第5回(6月18日)

イエ・家族・祖先——日韓比較民俗論の予備的考察(八木 透)

第6回(7月2日)

<特別報告>カンカンスオレ考——歌掛けとの比較(岡山善一郎)

韓国における収穫儀礼の特質

——稲作儀礼からみた日韓比較民俗試論(政岡伸洋)

第7回(7月16日)

川端康成と黄順元との季節表現の比較

——日・韓の季節観の比較研究の序説として(申 禮淑)

第8回(10月1日)

魯迅と日本——「魯迅の日本観」序説(吉田富夫)

第9回(10月15日)

日本の国語教育を中心とする比較研究
——その1. 二つの変革期(森本正一)

第10回(10月29日)

<特別報告>韓国家族における嫁と姑(竹田 旦)

第11回(11月12日)

夏目漱石におけるアジア——《朝鮮観》を視座として(三谷憲正)

第12回(11月26日)

日清戦争をめぐる——その1. 日本と中国の理解について(原田敬一)

第13回(12月17日)

南宋時代における紛争と裁判(徳永洋介)
朝鮮開国期の称号問題(山口 修)

第14回(1993年1月14日)

「健康と食事」についての予備的調査(中野 遼)
東アジアの親耕親蚕儀式と耕織図(河野道明)

第15回(1月28日)

江南の古代文化——倭文化源流の一つ(杉本憲司)
対華21か条要求をめぐる日中関係について(清水 稔)

〔1993年度開催の研究会の記録〕

第1回(4月22日)

明治仏敎の海外布敎(北西 弘)

第2回(5月6日)

<特別報告>正倉院と唐の文化
——正倉院の鹿文銀盤を中心として(王 維坤)

第3回(5月20日)

<特別報告>中国初期対日ボイコットについて(菅野 正)

第4回(5月27日)

<特別報告>朝鮮半島分断の原点(高屋定國)

第5回(6月3日)

<特別報告>古代の中国・朝鮮・日本での「倭」の変遷(井上秀雄)

第6回(6月10日)

川端康成と黄順元の季節感の比較Ⅱ(申 禮淑)

第7回(6月17日)

二重葬制と祖霊祭祀の構造と地域性

——伊豆・奄美・韓国の比較より(八木 透)

第8回(7月1日)

韓国漁村発展の課題(豊福陽一)

第9回(7月8日)

日本中世流通史からみた日韓交渉史における二・三の問題(貝 英幸)

第10回(7月15日)

古代日本における仏教音楽の受容——伎楽の実態と理念(峯 雅彦)

第11回(9月30日)

郭沫若・陶晶孫と日本(吉田富夫)

第12回(10月7日)

元寇に対する日本と越南(山口 修)

第13回(10月14日)

日本の農耕儀礼と政治

——日本の古代・中世政治史の再構成のための準備として(河野通明)

第14回(10月21日)

中国の都市文明誕生について(杉本憲司)

第15回(10月28日)

農耕儀礼の日韓比較民俗試論

——大韓民国北済州郡旧左面金寧の村落祭祀を事例として(政岡伸洋)

第16回(11月11日)

漢字教育の日中比較(森本正一)

第17回(11月18日)

中国専制国家の「法的構造」——宋～清(徳永洋介)

第18回(12月9日)

日清戦争をめぐるⅡ——軍夫問題を中心として(原田敬一)

第19回(12月16日)

健康と食事(中野 遼)

第20回(1994年1月13日)

夏目漱石の《朝鮮》——〈相対的な眼差し〉をめぐる(三谷憲正)

第21回(1月20日)

対華21か条要求をめぐる諸問題——満蒙をめぐる国際関係(清水 稔)

〔総合研究所第4回公開シンポジウム「東アジアの村落と家族」の記録〕

このシンポジウムは、わが研究班の活動の一環、とくに研究班活動の研究領域(3)を補填する役割をもつものとして企画され、半年におよぶ準備期間をへて、1993年10月16日(土)午後1時より、本学四条センター講堂で開催された。八木透氏(嘱託研究員、本学助教授)をコーディネーターとし、江守五夫氏の基調講演と末成道男氏<中国>、松本誠一氏<韓国>、上野和夫氏<日本>の地域報告が行なわれ、それに対する清水稔(主任研究員)、豊福陽一氏(自由研究員)、政岡伸洋氏(同前)のコメントがそれぞれなされた。テーマが日常生活の延長線上にある家族と村落であったこと、民俗学・歴史学・人類学・社会学等の分野にまたがる報告であったこと等から、具体的かつ視点の明確な質問が多く出され、その質疑応答は熱気に溢れ、閉会の6時を大幅にこえた。150余名の参加者をえて、実に多彩で稔りあるシンポジウムであった。

シンポジウムのねらいは、社会人類学・民俗学・民族学・歴史学等の学際的な見地に立って、中国・朝鮮・日本の3地域社会における村落と家族について、構造と構成の両面から、共通性・異質性を意識的に探り出し、それによって東アジアにおける村落と家族の類似性や、それぞれの地域における特質を明確にしようとするところにあった。シンポジウムでは、各地域に立脚した共通性・異質性は明らかにされたが、概念規定をふくめた各地域相互間の諸問題は今後の課題となった。

このシンポジウムの基調報告、地域報告、コメントはすでに『総合研究所報』6号(1994年5月1日)に掲載されているので、ここでは報告のテーマと報告者を記すにとどめる。なお所属・職階は当該年度のものである。

基調講演

東アジアからみた日本の村落と家族(東京家政大学教授 江守五夫)

第1報告

中国の村と家(東京大学教授 末成道男)

第1報告に対するコメント(本学教授 清水 稔)

第2報告

韓国の村落と家族(東洋大学助教授 松本誠一)

第2報告に対するコメント(高野山大学助教授 豊福陽一)

第3報告

日本の家族と村落(国立歴史民俗博物館教授 上野和男)

第3報告に対するコメント(本学大学院博士課程在学 政岡伸洋)

3. 1994年度の活動

2年間の研究期間をおえた1994年度、「アジアのなかの日本」研究班は、談話会と改称し、次の4点の活動を行なった。(1)班外の講師を招いての研究会の開催、(2)本学四条センターとの提携による公開講座の開講、(3)研究報告書の執筆と刊行、(4)研究文献目録のカードの作成である。

(1)研究会の開催とその報告の概要について

第1回(7月7日)

中国における社会学の受容について 星 明(本学社会学部助教授)

学問の世界に政治が深く影を落とす現代中国にあって、この十数年来の中国の「4つの現代化」の進展によってはじめて社会学が認知されはじめた現況と、清朝末期に中国に紹介された社会学の内容について分析した。

第2回(10月13日)

中国珠江デルタの農村社会 片山剛(大阪大学文学部助教授)

1949年以前の珠江デルタ農村の集落とその結合体について、実地調査と文献調査との有機的結合による分析を試みる。そのなかで集落の定義、行政村落と集落の関係、複数集落の結合体としての村の精神的紐帯(神廟)、集落の周囲の農用地に対する耕作権、デルタ農民にとっての漁業(蛋民)等についての問題を解明した。

(2)公開講座の開催と講座の概要について

10月から12月の間に5回にわたり、「近代日本人のみたアジア」と題する公開講座を開催する。日本は明治維新以後アジアのなかでいち早くヨーロッパ的近代を實現し、とりわけ日清戦争を契機としてヨーロッパ重視、アジア蔑視の風潮が顕著となった。こうしたなかで近代日本の知識人が東アジアをどう見てきたのかを考察したのが、今回の講座である。まず近代日本人のアジア観を展望しつつ、具体的には中里介山・国木田独歩・夏目漱石・福沢諭吉・泉鏡花らの知識人を取り上げ、彼らが日本をアジアのなかでどう位置づけていたのか、つまりかれらのアジア観・中国観・朝鮮観を分析した。さいごに日本の近代に学ぶために留学してきた中国人青年が日本をどのように分析し、また日本人のアジア観をどう受けとめていたかを明ら

かにした。演題と要旨は次のとおりである。なお所属・職階は1994年度のものである。

第1回(10月7日) 鈴木貞美(国際日本文化研究センター助教授)

ナショナリズムとアジア——中里介山を中心に

日本近現代のアジア観とナショナリズムの関係を概観する。明治初期から第2次世界大戦時までを、中里介山を中心軸にして郷土主義・国民国家主義・アジア主義・人類普遍主義の4項の関連で分析する視角を明示した。なおこの講演録は本紀要におさめられている。

第2回(10月21日) 芦谷信和(立命館大学文学部教授)

国木田独歩のみた朝鮮・中国

日清戦争に記者として従軍した独歩は、『国民新聞』紙上に〈愛弟通信〉を掲載した。軍艦千代田に乗艦して、朝鮮の大同江や中国の大連湾・威海衛等に上陸した。そこで何を見、何を感じたか。独歩の人間観・文学観を検討した。なおこの講演録は本紀要におさめられている。

第3回(11月4日) 三谷憲正(本学文学部助教授)

夏目漱石におけるアジア

漱石はアジアとくに中国・朝鮮をどのように見たか。その思考の特徴は物事の一面だけでなく、もう一方の側へもその視線が届いている。そんな点を具体的な言説を引いて追求した。なお『総合研究所紀要』創刊号所収の三谷「夏目漱石におけるアジア—《朝鮮観》を視座として」を参照されたい。

第4回(11月18日) 原田敬一(本学文学部助教授)

諭吉と鏡花

日本近代の知識人を代表する福沢諭吉と、「概念小説家」といわれる泉鏡花、この二人を日清戦争という大事件をめぐって比較する。この戦争は日本の近代の大きな分岐点となった。二人を通じて日本の近代の意味を探った。なお原田には『総合研究所紀要』創刊号に日清戦争の隠された兵員「軍夫」についての論考「日清戦争の史料二、三について」が収録されている。

第5回(12月16日) 清水 稔(本学文学部教授)

中国人留学生と日本の近代

日清戦争の敗北を契機として近代日本に学ぼうとする中国人青年が急増した。彼らは、日本留学のなかで日本の近代から何を学ぼうとしたのか。また彼らが学びとったものがなんだったか。彼らの日本での学習を通じて考察した。なお本紀要

所収の清水の論考はこれを素材にまとめあげたものである。

(3)研究報告書について

『佛教大学総合研究所紀要』第2号別冊「アジアのなかの日本」をもってあてる。

(4)研究文献目録について

すでにカードへの収録を完了、1995年度中に雑誌目録として刊行し、大学のパソコンネットワークにのせる作業を行なう予定である。収録した論文は、①日本・中国・朝鮮相互の関係・交流・影響等が叙述されているもの、②歴史・文学・民俗・政治・経済等の分野、③1945年1月から95年3月までのもの、④古代から現代までのものである。

4. 研究成果

本紀要(2号別冊)がわが研究班の2年間にわたる研究の総括編となるべきものであるが、すでに研究の一端を創刊号に披瀝しており、両紀要の諸論考が相補って総括編を構成していることに留意していただきたい。ここに各研究員・特別報告者の成果の一端を一覧にして、まとめとしたい。なお(1)は研究所紀要の創刊号、(2)は2号別冊を示す。

(1)前近代の日本と東アジアの領域

- | | |
|-------------|---|
| 河野通明(嘱託研究員) | 日本における犁耕国内発生説の再検討(1)
龍骨車の日本への伝来について(2) |
| 杉本憲司(嘱託研究員) | 吳越文化の鳥(『鷹陵史学』19, 1994年3月)
平安貴族の中国風教養について
——『日本国見在書目録』よりみての一考(2) |
| 徳永洋介(嘱託研究員) | 南宋時代の紛争と裁判——主佃関係の立場から
(京都大学人文科学研究所『中国近世の法制と社会』
1993年3月) |
| 峯 雅彦(自由研究員) | 伎楽の実態と理念
——中国から日本への音楽伝来の軌跡(2) |
| 王 維坤(特別報告者) | 考古学から見た孔子の学説の東伝とその影響(2) |

(2)近現代における日本と東アジア

- | | |
|-------------|----------------------|
| 北西 弘(専任研究員) | 明治初期における東本願寺の中国開教(1) |
| 清水 稔(兼担研究員) | 近代日中関係史の一断面 |

- 21か条要求をめぐる(1)
 中国人留学生と日本の近代(2)
- 原田敬一(嘱託研究員) 日清戦争の史料二, 三について(1)
- 三谷憲正(嘱託研究員) 夏目漱石におけるアジア
 — 《朝鮮観》を視座として(1)
 オンドルとハングルの国にて
 — 僕の韓国ノートより(2)
- 森本正一(嘱託研究員) 日中の教育比較論—デューイの影響を中心に
 (佛教大学『教育学部論集』5, 1993年3月)
 漢字教育の日中比較(2)
- 山口 修(兼担研究員) 朝鮮開国期における称号問題(1)
 「天皇」称の系譜(2)
- 吉田富夫(嘱託研究員) 抗日戦争期の陶晶孫
 (『立命館国際研究』6-3, 1993年12月)
 周樹人の選択—〈幻灯事件〉前後(2)
- (3)東アジアの文化と日本
- 申 禮淑(嘱託研究員) 川端康成と黄順元, それぞれの季節
 — 日・韓の季節観比較研究の序説として(1)
 日・韓季節観の比較研究
 — 四季の時間的認識を中心に(2)
- 八木 透(嘱託研究員) 家と祖先祭祀をめぐる日韓比較民俗試論
 — その研究視角と課題を中心とした
 予備的考察(1)
 日本の改葬習俗と韓国の草墳
 — 死者祭祀と葬制の日韓比較論の試み(2)
- 政岡伸洋(自由研究員) 村落祭祀の日韓比較民俗試論
 — 大韓民国済州道北済州郡
 旧左邑金寧里の事例から(2)
- 岡山善一郎(特別報告者) カンガンスオレ考 — 韓国の歌垣的行事(2)